

近代・オリエンタリズム・越境性

——仏教研究における近年の一動向をめぐる——

オリオン・クラウタウ

はじめに

近年、概念としての「仏教 Buddhism」というひとつの「宗教 religion」——或いは場合により、「哲学 philosophy」——は様々な視点から再考され、特に1980年代末よりその課題に取り組む研究書や、反省的に「仏教」の今後の可能性を語る著作など、数多くの成果が出されてきた。

この営みは、1978年に公刊されたエドワード・サイードの『オリエンタリズム』が提示する批判と密接な関係を有することは言うまでもない。¹「アラブ世界」としての「オリент」に重点を置いたサイードの手法は、「仏教」（及び「東洋」）を考察するために利用されるようになっており、そうした動向を象徴する成果の紹介と、その意義に関しては以下に述べたい。まずその主旨を示しておく——例えばなかでも著しい成果である P.アーモンド『英国における仏教の発見』（1988年公刊）や²、R.-P.ドロワ『虚無の信仰——西欧はなぜ仏教を怖れたか』（1997年公刊）が描くように³——「仏教」は19世紀において西洋人の想像力により構築された概念、ということである。

1 SAID, Edward W. *Orientalism*, 25th Anniversary Edition, with a New Preface by the Author (New York: Vintage Books, 2003 [1978]). 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上下』（平凡社、1993年）。

2 ALMOND, Philip C. *The British Discovery of Buddhism* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988).

3 DROIT, Roger-Pol. *Le culte du néant : les philosophes et le Bouddha*, Éd. augm. d'une préface. (Paris: Seuil, 2004 [1997]) 島田裕巳・田桐正彦訳『虚無の信仰——西欧はなぜ仏教を怖れたか』（トランスビュー、2002年）。

無論、今日で言う東アジア社会において、「仏教」・「仏法」・「仏道」という一連の言葉は古くから用いられ、それは19世紀における西洋のオリエンタリスト的な研究とは無関係である。例えば、日本列島における三国観が語るように、「仏法」はこの島々を越えるリアリティであり、「天竺」なる地にその起源がある、という認識が存在した。しかし、かかる伝統的な理解からすれば、「天竺」は「印度」と同一のものでなければ、「仏法」はインド、チベット、スリランカ、タイ、ネパール、モンゴル、中国、朝鮮、日本の多くの地域に広がる“ひとつの宗教”を成すものでもない。ここで言われている“仏教の構築”とは、こうして単にバラバラであった「仏教」における同一性の「発見」とその観念的統合のプロセスのみならず、それは「仏教」というこの新たな「発見物」の「理想的姿」の生成過程でもある。

以上を踏まえ、本稿のねらいはまず、近代における「仏教 Buddhism」の生成とその「越境性」をめぐる文献（主に未邦訳のもの）の紹介にある。具体的には、「日本の仏教は仏教ではない」という、中近世の日本列島なら不可能であったろう見解 dictum を可能ならしめた「近代」の言説空間の形成を考え、「西洋学界の構築物としての仏教」という新たな研究「常識」の上で如何なる「仏教」研究が行われたのか、また、オリエンタリスト的母体を相対化した上での仏教言説の可能性は如何に語られているのか、などを概観したい。

「仏教 Buddhism」の誕生

1829年に、“Budhism” (sic) という単語を掲げる初の英語での書物が公刊される。しかし、断るまでもなく、それは「西洋人」による「仏教」をめぐる初の考察とはいえない。マルコ・ポーロは『東方見聞録』（13世紀末成立）においてスリランカの“Sagamoni Borcan”に関して語った。そして大航海時代になり、アジアの各域を回ったイベリア人を始めとするヨーロッパの探検家・航海者・商人は各国にみられた偶像——ビルマの“Godama”、シャムの“Sommona Codom”、中国の“Fo”、バリ島の“Khodom”、インドの“Boodhoo”——に関しても言葉を残しているが、それらを何らかの形で同一の存在として認識す

ることはなかった⁴。16世紀の段階には、東アジアにおいて活動したイエズス会の宣教師などは物質的なレベルでも中国と日本における仏教の類似点を認識したが、それはひとつの「仏教」の構築につながることはなかった——例えば、フェルナン・メンデス・ピント『東洋遍歴記』（初版1614年）においては両国を語る際に「阿弥陀 Amida」に対する信仰が登場するが、ピントは「偶像崇拜」と区別できる「仏教」に関して語ることはない。むしろここでは偶像崇拜の性格が強調され、「坊主 bonzo」は四つの「仏 fatoqui」なる「神 deus」——すなわち「釈迦 Xaca」、「阿弥陀 Amida」、「地藏 Gizom」、「観音 Canom」——を崇拜する存在として描かれる⁵。

ドナルド・ロペスが指摘するように、17世紀の欧州社会の共通理解では、世界には四つの宗教しか存在しない——キリスト教 Christianity、ユダヤ教 Judaism、イスラム教 Islam（当時モハメド教 Mohammedism としても呼ばれた）、そしてペイガニズム Paganism（或いは偶像崇拜 Idolatry）のみである。ロペスは、「宗教をめぐる学術的考察の歴史は、ある意味で、ペイガニズムを〈イズム〉のより長いリスト——ヒンドゥー教 Hinduism、儒教 Confucianism、道教 Taoism、神道 Shintoism、シク教 Sikhism、そして当然、仏教 Buddhism——に置き換えるプロセスである」と述べている⁶。「偶像崇拜」とは異なる、アジアの広範囲に及ぶ「宗教」あるいは「哲学」としての仏教は、18世紀末の「東洋学」なる研究分野の成立を待たなければならなかった。シカゴ大学のジョナサン・Z. スミスによる「宗教に関するデータは存在しない。宗教とは学者の研究によって生み出されたものにすぎないのである」という格言は⁷、仏教の場合にもやは

4 LOPEZ Jr., Donald S. “Buddha”. In *Critical Terms for the Study of Buddhism*, edited by Lopez Jr. (Chicago : Chicago University Press, 2005), p.15.

5 PINTO, Fernão Mendes. *Peregrinaçam*. (Lisboa : a custa de Belchior de Faria, 1614), 第215章を参照。この著作はポルトガル国立図書館 Biblioteca Nacional de Portugal のウェブサイト（<<http://purl.pt/82>>, 2009年10月11日アクセス）にて閲覧可能である。

6 LOPEZ Jr, Donald S. *The Story of Buddhism : A Concise Guide to its History and Teachings* (San Francisco : HarperSanFrancisco, 2001), p.11および前掲の LOPEZ, “Buddha”, P. 5.

7 “[T] here is no data for religion. Religion is solely the creation of the scholar’s study” (SMITH, Jonathan Z. *Imagining religion : from Babylon to Jonestown*. Chicago : University of Chicago Press, 1982, p. xi, original emphasis [強調は原著者])

り驚くほどの事実を有しているのである。

「仏教」なるものの構築は、「インド仏教」を中心とする営みとして始まり、大英帝国の植民地行政と密接な関わりを有するものである。ヒンドゥー教とは区別され得る「仏教」（そしてそれとは不可分な要素である歴史的仏陀）の探究は、イギリス東インド会社の学者であったウィリアム・ジョーンズ（1746－1794）により大きく展開されたのである。文献上の様々な Buddha を説明すべく二人の「歴史的ブッダ」——ヒンドゥー教の枠組みで活動した「ブッダ」と、それに対する改革を求めた「ブッダ」——を提唱したジョーンズの説は、「仏教」なる単語を掲げる最初の著作であるエドワード・アバム『仏教の歴史と教義』（1829年公刊⁸）にも受け継がれ⁹、批判か継承かのいずれかの形で当時、大きな反響を引き起こした。ジョーンズの段階には仏教の起源地や釈迦の人種をめぐる議論も盛んであったが¹⁰、彼が扱った主な資料は「仏教文献」ではなく、バラモンの学者が解説したヒンドゥー教文献である¹¹。それを大きく変えたのが、ジョーンズと同じく植民地行政官であったブライアン・H. ホジソン（1800－1894）である。彼はネパールのある寺院に保存されていたサンスクリット語で記された仏教文献147通を、フランス人の東洋学者ウージェーヌ・ビュルヌフ（1801－1852）に届けた¹²。これは、「仏教学」の発展において様々な意味で決定的な出来事である。これらの資料は、ビュルヌフの画期的な『インド仏教序説史』（1844年公刊¹³）の基本材料となり、この著作はそれまで行われていた

8 UPHAM, Edward. *The History and Doctrine of Buddhism, Popularly Illustrated; with Notices of the Kappooism, or Demon Worship, and of the Bali, or Planetary Incantations of Ceylon: with Forty-three Lithographic Prints from Original Singalese Designs* (London: R. Ackermann and Co, 1829).

9 前掲 ALMOND, *The British Discovery of Buddhism*, p.17.

10 仏教の起源地について ALMOND, pp.20－24を見よ。仏陀の人種をめぐる議論に関しては、前掲の LOPEZ, “Buddha”を参照。

11 LOPEZ, “Buddha”, p.16.

12 LOPEZ Jr., Donald S. “Introduction”. In *Curators of the Buddha: The Study of Buddhism under Colonialism*, edited by Lopez Jr. (Chicago: University of Chicago Press, 1995), p. 3.

13 BURNOUF, Eugène. *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien* (2e éd. rigoureusement conforme à l'édition originale et précédée d'une notice de Barthélemy Saint-Hilaire sur les travaux de Eugène Burnouf). (Paris: Maisonneuve, 1876 [1844]).

様々な議論に決着をつけ、以降の「仏教」をめぐる理解を左右するものとなった。ビュルヌフのこの著作は、「仏教」をアジア現地の仏教とは無関係な、ひとつの「文献の世界 world of texts」に展開させた¹⁴。

つまり、それまでの段階には現地社会の知識人は文献を解説する上で（ある程度の）権威を有していたのに対し、19世紀後半には彼らは不要な存在となる。仏教教義の体系化、仏教の「正しい」姿や「誤った」姿など、それを定めるのは「東洋」において「仏教」を実践する者ではなく、欧州の非仏教徒の学者であった。下田正弘がアーモンドの研究を踏まえながら指摘しているように、「ほんらい東洋にしか存在せず、西洋にとっては異世界の他者であるはずの仏教が、文献におさまることによって、校訂、翻訳、研究、比較という作業の対象として、西洋の図書館に、大学に、植民省に、そして伝道協会に位置づけられ、西洋世界のただなかにその中心を移すこととなった」のである¹⁵。さらに、仏教の理想は“人間” ゴータマ・シッダータが示した“教え”に基盤を据えられるものとなったが、それは当時の「著者たちが理想とする人間像……をブッダに付与したから」であった¹⁶。

こうして、「仏教」という「アジア」に存在しなかった構築物は欧州学界のオリエンタリスト的な想像力により出来あがっていった。賛辞なり不満なり、キリスト教を基盤とする社会への感情は、制度的な束縛のない、個人の（「宗教」よりも）「哲学」である、シャーキャムニの“教え”たる「仏教 Buddhism」の発見として表された。しかし、理想化されたブッダの行動や教義と乖離し、アジアの各地に実際に窺われた仏教的な実践や思想は、「衰微」の様相として捉えられるようになった——大乘仏教そのものまでも、ブッダの「純粋な教え」より離れたものと把握され、研究対象に値しないものとして片付けられた（この問題に関しては後述）。

以上、「仏教」が仏教学者の研究によって生み出されていったプロセスとそ

14 前掲 LOPEZ, “Introduction”, *Curators of the Buddha*, p. 5.

15 下田正弘「仏教研究と時代精神」『龍谷史壇』122号、2005年、32頁。

16 下田「仏教研究と時代精神」、32頁。

のコンテキストを簡単に述べた。以下、その仏教概念の行方を簡潔に述べ、「日本」研究者としての筆者自身のこの議論に対する立場を示したい。

「仏教」の行方

上記で取り上げた欧州における「仏教」の形成過程をめぐる批判的記述、あるいは（アジアを含む）世界各地におけるその構築物の受容を考察する著作が近年、次々と出版されている。例えば、前掲アーモンドの『英国における仏教の発見』に加え、19世紀フランスにおける「哲学」としての仏教の受容を描く上記のドロワ『虚無の信仰』（1997年）も画期的な研究であろう。ドロワはフランスやドイツの哲学者により「ニヒリズム」として描かれた「仏教」を考察し、それが「哲学」——しかもキリスト教社会が恐れるべき思想体系——として認識された1820年代より、かかる理解を大きく展開させた1893年のシカゴ万国宗教会議の時期までに焦点を当てている。この会議は東西における「宗教」概念の定着には極めて重要な意義を有するイベントであり、「仏教」をめぐる記述は東洋学者の手から離れ、彼らによる一方的な営為では最早なかったことを象徴している。万国宗教会議は、「仏教の当事者」が自らの「宗教」に関して語る権威を回復していく——或いは見方により初めて手に入れる——場であり、そのプロセスを（日本仏教を中心に）描いた著作として、ジュディス・スノッドグラス『西洋に日本仏教を紹介する——オリエンタリズム、オクシデンタリズム、コロンブス世界博覧会』（2003年）がある¹⁷。

こうして19世紀半ば、欧州の東洋学による構築物としての「仏教」は、20世紀への変わり目に欧州以外の国々にも積極的に受容されるようになる。「近代

17 SNODGRASS, Judith. *Presenting Japanese Buddhism to the West: Orientalism, Occidentalism, and the Columbian Exposition* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2003) および KETELAAR, James. *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Its Persecution* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1990) 岡田正彦訳『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』ぺりかん社、2006年）の第4章「バベルの再召——東方仏教と一八九三年万国宗教大会」を参照。なお、筆者は直接に参照していないが、万国宗教会議に関して SEAGER, Richard. *The World's Parliament of Religions: The East / West Encounter, Chicago, 1893* (Bloomington: Indiana University Press, 1995) もよく言及される著作である。

化 modernization』というプロセスと同一である、「仏教」（あるいは、上記で示したような「仏教」概念）の世界化過程——その越境性とも言えるかもしれない——を考えるにあたって、トマス・トゥード『アメリカと仏教との出会い、1844年－1912年』（1992年公刊¹⁸）やクリスチナ・ロシヤ『ブラジルにおける禅——コスモポリタンの近代の探求』（2005年公刊）が参考になる¹⁹。なお、近刊予定のものであるが、『野生の雁——カナダにおける仏教』（ジョン・ハーディング他編²⁰）および『オーストラリアにおける仏教——変遷中の伝統』（クリスチナ・ロシヤ他編²¹）も期待できる成果であろう²²。

同じく、「仏教王国チベット」なる西洋人による物語の形成と、チベット仏教をめぐる言説の展開に関しては、ドナルド・ロベス『シャングリラの囚人——チベット仏教と西洋』（1999年公刊²³）も取り上げるべき成果であろう。更に、ゴンブリッチ&オバーセーカラ『スリランカの仏教』（1988年公刊²⁴）は、西洋的な宗教概念がスリランカの「プロテスタント仏教」の形成に如何に関わっ

18 TWEED, Thomas A. *The American Encounter with Buddhism, 1844-1912: Victorian Culture & the Limits of Dissent*, with a new preface by the author (Chapel Hill, NC: Univ. of North Carolina Press, 2000 [1992]).

19 ROCHA, Cristina. *Zen in Brazil: The Quest for Cosmopolitan Modernity* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2006). なお、ブラジルにおける仏教に関しては論文集の *O Budismo no Brasil* (edited by Frank Usarski, São Paulo: Lorosae, 2002) も取り上げるべき近年の成果である。

20 HARDING, John; HORI, Victor; SOUCY, Alexander; eds. *Wild Geese: Buddhism in Canada* (Montreal: McGill-Queen's University Press, forthcoming).

21 ROCHA, Cristina & BARKER, Michelle, eds. *Buddhism in Australia: Traditions in Change* (London: Routledge, forthcoming).

22 その他にも、「西洋の仏教」に関する全体的な議論を紹介した上で南アフリカやイスラエルについての論考も所収されている *Westward Dharma: Buddhism beyond Asia* (edited by Charles Prebish & Martin Baumann, Berkeley: Univ. of California Press, 2002) や浄土教に焦点を当てた Galen AMSTUTZ の *Interpreting Amida: History and Orientalism in the Study of Pure Land Buddhism* (Albany: State University of New York Press, 1997) も取り上げるべき成果である。最後に、「仏教」と「西洋」という問題を全体的に考察しようとする David L. McMAHAN の *The Making of Buddhist Modernism* (New York: Oxford Univ. Press, 2008) も是非、参照されたい。

23 LOPEZ Jr., Donald S. *Prisoners of Shangri-La: Tibetan Buddhism and the West*. Chicago: (University of Chicago Press, 1998).

24 GOMBRICH, Richard & OBEYESEKERE, Ganath. *Buddhism Transformed: Religious Change in Sri Lanka* (Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press, 1988) 島岩訳『スリランカの仏教』（法蔵館、2002年）。

たのかを示している。本書や、先述のスノッドグラス著にも窺えるように、19世紀後半に「仏教」は欧州の東洋学者の独占物ではなくなり、アジア各国にいる仏教者自身が自らの実践をすすめる上での枠組みとなっていく。

こうして、「仏教」の“生成”および近代のなかでのその“越境性”を描く著作は近年、次々と公刊されており、いずれもかかる概念のオリエンタリスト的な側面に対して克服と反省を示そうとする。殊に「反省」の面において、1995年公刊の論文集『ブッダの学芸員——植民地主義下の仏教研究』（ドナルド・ロペス編²⁵）も取り上げなければならない成果であり、これは分野を止揚させた。以上、「仏教」概念の歴史は様々な視点から再考され、そのオリエンタリズムやコロニアリズムとの関係も様々な立場より明かされてきた。一方、概念史のみならず、その成果を踏まえた上での学術用語としての「仏教」の“今後”——換言すればその可能性——を考える類の著作も公刊されてきており、その紹介に努めたい。

「仏教」の可能性

ここではまず、先述のロペスが編集した論文集『仏教研究のための批判的用語』（2005年）を取り上げよう²⁶。多岐にわたる専門分野の仏教研究者が執筆者となっているこの著作は、様々なキーワード（例えば「仏陀 Buddha」、「死 Death」、「歴史 History」、「制度 Institution」、「実践 Practice」、「儀礼 Ritual」、「性 Sex」、「近代 Modernity」等々）を項目に分け、当該キーワードは、伝統社会と近代社会における「仏教」の更なる理解には、如何に光を当てられるのか、などが考察される。ちなみにこの“伝統”と“近代”といった対立は、ロペスの研究を方向づけてきたカテゴリであるとも言えよう。いや、さらに言えば彼の特徴とは、伝統と近代を「対立」としてでなく、如何なる二元論をも廃棄し、それらの“調和”にこそ、「仏教」を把握する鍵があるというような立場である。ロペスが編集者となる2002年の『近代仏教——未悟の者への読本』や²⁷、2008

25 前掲（註12）の LOPEZ, *Curators of the Buddha*（1998）を参照。

26 前掲（註4）の LOPEZ, *Critical Terms for the Study of Buddhism*（2005）を参照。

年に公刊された単著の『仏教と科学——当惑者への手引書』にも²⁸、伝統と近代のはざま（あるいはその「はざま」をなし得たカテゴリとして）の仏教を捉える姿勢が窺える。

そしてベルナル・フォールと末本文美士の著作も取り上げたい。こうして二人を列挙することに違和感を覚える者もいるかもしれないが、筆者はこの二人もロペスと同様、異なる視座より「仏教」を通して近代社会におけるいくつかの「二元論」を批判していると考ええる。まず、フォールを見てみよう。1998年の『諸仏教、諸哲学、諸宗教』において²⁹、「宗教としての仏教」や「哲学としての仏教」という二つのカテゴリを合わせ、「二諦 satyadvaya」などの伝統的な論理を踏まえながら、西洋的合理主義を考察する「方法としての仏教」を展開している³⁰。要するに、東洋的、神秘的なものとしての仏教ではなく（フォールは本著において、オリエンタリスト的な仏教理解がもたらした幾つかの「神話」を打破した上で自論を展開している）、西洋／東洋という二元論を乗り越える道具としての仏教思想の可能性を提唱している、といった言葉でフォールのねらいをまとめても大きな誤りはなかろう。末本文美士も近年、異なる視座より「方法としての仏教」を掲げ、ある二元論を乗り越えようとしている。元は中世日本の仏教研究で名高い末木は、2000年代に入るとその研究対象を近現

27 LOPEZ, Donald, ed. *Modern Buddhism: Readings for the Unenlightened* (London: Penguin, 2002).

28 LOPEZ, Donald. *Buddhism & Science: A Guide for the Perplexed* (Chicago: University of Chicago Press, 2008).

29 FAURE, Bernard. *Bouddhismes, philosophies et religions* (Paris: Flammarion, 1998). ちなみに表題をはじめとして仏教の「多様性」を強調する本著は、仏教を「複数形」で語る近年の学術的な傾向をよく表している。例えば、オックスフォード刊 *Very Short Introductions* というベストセラーシリーズの『仏教入門』（1996年）において、著者のダミアン・ケOWNも「ひとつの仏教」の本質的な捉え方に関して警告している。（KEOWN, Damien. *Buddhism: A Very Short Introduction*, Oxford & New York: Oxford University Press, 1996、特に pp. 1 - 3 を参照）。同じく、2007年公開の論文集『（諸）仏教考察入門』に編集者のカレン・デリスとナタリー・ガマーが仏教を「複数形」で語る必要性を示している（DERRIS, Karen & GUMMER, Natalie. "Introduction: Defining Buddhism(s)". In *Defining Buddhism(s): A Reader*, edited by Derris & Gummer. London & Oakville: Equinox Publishers, 2007, pp. 1 - 2）。

30 フォールは例えば、「仏教に思想があるということだけでなく、仏教は『考えるために役立つ』ということも示したい J'aimerais montrer tout d'abord que le bouddhisme pense et qu'il est «bon à penser»」という（FAURE, *Bouddhismes, philosophies et religions*, p. 9. 傍点は引用者）。

代にずらした。自社会における認知的制約に伴う様々な問題に取り組んでいる彼は、思想史研究にとどまらず、仏教を通してのひとつの「哲学」の構築をも目論んでいる。その試みは、例えば、2006年公開の『仏教 vs. 倫理』において³¹、如何に表れているのかを見てみよう。

末木は、従来の「古典仏教学」に対する或る種の「現代仏教学」を提唱するが、彼にとって「……仏教は手がかりであり、それ自体が目的ではない」のである³²。末木によれば、日本仏教は新宗教が促進するような「社会参加仏教」の存在にも拘らず、本覚思想などの影響で倫理基盤が欠けているが³³、彼は日本社会における倫理道徳を理解する「方法としての仏教」を提唱する³⁴。末木はさらに、倫理を『『人の間』のルール』と定義し³⁵、それらの「ルールは必ずしも一定不変ではな」く、「時代によって……ほとんど変わってゆく」とも主張する³⁶。つまり、倫理とは社会を成り立たせるルールではあるが、「共通のルールが壊れたとき、人は理解不能の『他者』として現れる」ことになる³⁷。しかもその理解不能の「他者」は外側ばかりでなく「自分の内にも住み着いて」おり、国家や自然など、様々な形で現れる（なかでも、「極限の他者」として、「死者」というものがある³⁸）。自己と他者、生者と死者、倫理と宗教、合理性と非合理性、社会参加仏教と葬式仏教——それらの「対立」を乗り越えつつ、日本社会への新たな可能性を示している。

フォールと末木のアプローチや研究動機には相違もあろうが、二者とも異なる領域のものを超越する（「止揚する」といった方がより適切かもしれない）「方

31 末木文美士『仏教 vs. 倫理』（筑摩書房、2006年）。

32 末木『仏教 vs. 倫理』、11頁。

33 日本仏教の「倫理欠如」と本覚思想に関しては、『仏教 vs. 倫理』23～31頁を見よ。「社会参加仏教 Engaged Buddhism」に関しては同著作、72～86頁を参照。

34 末木『仏教 vs. 倫理』、10～12頁。彼はさらに、次のように問い掛けている——仏教思想が「日本の文化の深層レベルに沈められ、僕たちの発想を規定しているのではないか。仏教的な発想の解明は、同時に僕自身の深層の解明ではないか」、と（同著、11頁）。

35 末木『仏教 vs. 倫理』、92頁。

36 末木『仏教 vs. 倫理』、97頁。

37 末木『仏教 vs. 倫理』、106頁。

38 末木『仏教 vs. 倫理』、174頁。

法としての仏教」を用いていることは看過できない。フォールと末木の試みを、「近代」なる時代の理解に迫るために従来の「仏教」言説における諸対立（仏教／科学、伝統／近代）を手がかりとしているロベスの試みに合わせて考えると、今日の仏教研究におけるひとつの傾向が見えてくるのではないか。更なる検討が必要であろうが、〈東洋思想としての仏教をめぐる記述〉の時代がその終焉を迎え、〈近代史としての仏教思想をめぐる考察〉が主流となる時代に変わりつつある、と見ることも、或いは可能であろう。

結びにかえて

以上、「仏教」概念をめぐる近年の動向に関して述べてきた。「仏教」は近代の欧米学界において如何に構築され、それはアジアの現地に如何なる影響を与えたのかに関する研究は、1990年代より次々と発表され、著しい成果が蓄積された。一方、概念の歴史のみならず、近現代の哲学・思想に取り組むための「方法としての仏教」も用いられ、その営みのなかに「仏教とは何か」（あるいは何であるべきか）という疑問への回答も消極的ながらも提示されている。

言うまでもなく、上記で取り上げたほとんどの著作は、サイードのオリエンタリズム批判を「仏教」に当てはめて語るか、或いはオリエンタリスト的な仏教理解を乗り越えた形での「仏教」を構築しようとしている。「西洋人」によるこういった「仏教」を暴露するのは重要な営みであることは否定できない。しかし一方、「西洋」に生まれたとされる「仏教」を、実践者たる「東洋人」（故に或る種の権威を有する語り手）は如何にして受け止め、現地においてその構築物をめぐる語りを如何に促進し、利用したのかなどに関する研究は比較的にまだ少ない。ロベスも指摘するように、サイードに対する批判のひとつは彼が「オリエント化の規定者 *Orientalizer* とオリエント化の対象 *Orientalized*」の間の交流ネットワークを十分に考察しないことである³⁹。その際、ロベスが高上げるアイジャズ・アフマドの言葉もここで記そう。

39 前掲 LOPEZ, "Introduction," *Curators of the Buddha*, p.12.

『オリエンタリズム』における特徴のひとつは、西洋による非西洋に関するテキスト textualities の歴史を、それらのテキストは植民地の知識層により如何に受容、容認、修正、挑戦、転覆、または再現されたのかとはほとんど無関係に検討していることである。〔さらに〕均一な集団として〔植民地の知識層を考察するの〕ではなく、彼らなりの対立、矛盾、特定の社会的・政治的位置、階級、ジェンダー、地域、宗教、等々を有する社会的エージェントとして〔それを考察すべき〕である⁴⁰……。

つまり、オリエンタリスト的な言説は、「オリエント人」自身が「近代人」として再出発するために如何にして利用されたのか、「現地社会」の多様性や対象となっている人物・団体の立ち位置を十分に考慮した上での研究も今後、必要であろう。“欧州＝近代”という捉え方はアジア諸国のみならず、資本主義世界の周辺地域（例えば、中南米）にも共通するものであろうが、アジアの場合は相手である「欧州」に対して語るべく、オリエンタリスト的な言説をある程度みずからの語りの枠組みにせねばならなかった。しかし無論、西洋より導入された諸言説の枠組みに自らを語りなおそうとする「アジア人」の思想的営為は——日本の事例からも分かるように——対立や闘争なしに進められたものでは全くない。アフマドが指摘するように、そのプロセスを考察する際に知識層の立ち位置なども念頭に置かなければならず、そうすることにより初めて「オリエンタリズム」の構造が理解可能となろう。

アフマドが語るこのダイナミックなプロセスを考察するにあたり、日本における仏教は好都合の対象であろう。「仏教」概念が西洋との共通言説となる1880年代以降⁴¹、日本の仏教（学）者は言説拡大の単なる傍観者であったのではなく、それを積極的に変化させ、「西洋」に返したのである。「ブッダの仏教」を「純粋な仏教」と捉え、「大乘仏教」を「衰微の様相」として規定した欧州仏

40 AHMAD, Aijaz. *In Theory: Classes, Nations, Literatures* (London & New York: Verso, 1994 [1992]), p. 172.

41 例えば、東京大学において仏教を講じた最初の人物である原坦山（1819-1892）に焦点を当てた拙稿「原坦山にみる明治前期仏教言説の動向」（『日本仏教総合研究』第7号、2009年）を参照。

教学者の理解は、19世紀日本の仏者からすれば最も危機感を覚えさせる問題のひとつとなり、大乘仏教の“名誉回復”のような作業に取り組んだ者は少なくない——日本国の「外」を念頭に置きながら語ろうとした日本の仏教者の殆どは、「小乗／大乘」なる対立を止揚させる形で言葉を提示している。「経験・体験 experience」を強調しようとする鈴木大拙（1870－1966）、「大乘仏教」（「日本仏教」といった方が或いは適切であろうが）をも含む形で「仏教」の「統一」を図ろうとする村上专精（1851－1929）、東洋学者のマックス・ミュラー（1823－1900）の下で学びながら大乘仏典の研究に取り組んだ南條文雄（1849－1927）のような者の思想的営為は、その全てを、「西洋」の仏教学界において構築された「仏教」言説に対する反発として理解してもよからう。

日本は、「仏教」に限らず、西洋の学術的言説を受け入れたばかりでなく、それを巧みに転覆し、自らの「近代化」に働かせたのである——「オキシデンタリズム」なるものが成立したのみならず、S.タナカが適切に示したように「日本型オリエンタリズム」というものすら成立可能となった⁴²。そのコンテクストにおいて、「仏教」について語った近代日本の知識人に焦点を当てた場合、より流動的な構築物としての「オリエンタリズム」や、「近代化」と「西洋化」との差異など、そういった議論に何らかの形で貢献できるであろう。

付 記

本稿は日本国文部科学省国費外国人留学生制度の援助によって行われた研究成果の一部である。

42 例えば TANAKA, Stefan. *Japan's Orient : Rendering Pasts into History* (Berkeley : University of California Press, 1993) を参照。いずれにしても、近代日本における「仏教」観念の広がりには、同国における「アジア」言説の定着と密接に関係しており、近年その問題に取り組む研究がいよいよ増えてきた。それに関して、リチャード・ジャフィの研究——“Seeking Sakyamuni : Travel and the Reconstruction of Japanese Buddhism” (*Journal of Japanese Studies*, 30 / 1, 2004 前川健一訳「釈尊を探して——近代日本仏教の誕生と世界旅行」『思想』943、2002年) および “Buddhist Material Culture, ‘Indianism’, and the Construction of Pan-Asian Buddhism in Pre-War Japan” (*Material Religion*, 2 / 3, 2006 桐原健貞／オリオン・クラウタウ共訳「戦前日本における仏教的物質文化、〈インド趣味〉、および汎アジア仏教の形成」『東北宗教学』第4号、2008年) ——を参照。小川原正道編『近代日本の仏教者——アジア体験と思想の変容』（慶應義塾大学出版会、2010年）所収の諸論考も参照のこと。

Modernity, Orientalism, Transnationalism : Some Notes on Recent trends in Research on Buddhism

Orion KLAUTAU

The aim of these research notes is to provide an overview of “post-orientalist” research on “Buddhism”, which still remains largely untranslated into Japanese. I will introduce studies of authors such as Philip Almond and Roger-Pol Droit, who described the “European” configuration of Buddhism as a “world of texts”. I will give special attention to the works of Donald S. Lopez Jr., whose scholarship can be described as a struggle to understand –and thus, to overcome– Buddhism’s colonial past. I will then briefly introduce current research trends which, based on the criticism presented by authors such as Lopez Jr., have focused on the “spread” of Buddhism and its reception in various regions of the globe, in the context of modernity. I will attempt a comparison of the works of Sueki Fumihiko and Bernard Faure, both of whom speak of more pragmatic uses of the concept of “Buddhism”, in order to understand different aspects of modernity itself. Finally I will, based on my own research findings, mention what kind of contribution scholars focusing on Modern Japanese Buddhism can make to the above-mentioned discussion, and perhaps shed new light on the current critique of Orientalism.